

第6回東京大学医学系研究科公共健康医学専攻 運営諮問会議
議事録（暫定案）

日時：2024.12.9（月）16:00～17:30

場所：医学部教育研究棟 2階第2セミナー室

出席者：坂元委員、浅野委員、飯田委員、馬場委員

陪席者：橋本（公共健康医学専攻長）、康永（公共健康医学専攻教授）、
福士、村川（大学院担当）

1. 事務局挨拶

議事に先立ち、橋本専攻長より、挨拶があった。

2. 委員、出席者紹介

橋本専攻長より、委員及び出席者の紹介がなされた。

3. 議長選出

橋本専攻長より、議長について自ら担当してよろしいか提案があり、審議の結果、承認された。

4. 教育活動報告と質疑

橋本専攻長より、資料に基づき以下の報告及び質疑応答があった。

(1) 2023年度修了者について

- ・2年コースの18名が課題研究発表を行った。うち1名の課題研究の評価について議論があったが、今年度もこれまでの総合評価を維持し評価を行う予定である。
- ・進路では民間が多かった。
- ・修了者アンケートでは、実践的な学びの場や、中上級の統計学の講義についての要望があることが読み取れる。実用性スキルや高度な知識が身についたと回答している割合が低い点は過去の修了生と傾向は同じ。

(2) 2024年度学事進行について

- ・2024年度の進学者数や在籍者数、教員数について説明があった。
- ・インターンシップでは1名が自主的にJAXAに応募し参加した。
- ・厚生労働省の教育訓練支援制度では1年コースの入学者数が定員を満たしていないとの指摘がなされ、今年度は指定の対象外になった。
- ・今年度の課題研究発表会では長期履修者の影響や1年コースの発表者が多か

ったことから、例年より多い 35 名が発表予定である。

(3) 2025 年度入学予定者について

・志願者数、受験者数、合格者数について説明があった。医師の資格を持つ者が 15 名と多く、1 年コースではなく 2 年コースを志望する受験生が増えている。

(4) 国際ほか対外活動・学生海外派遣の状況

・ソウル大学との学生交流が活発になってきており、交流をきっかけに学内プロジェクトが発足している。

・ソウル大学に加え北京大学とも交流が進んでおり、今後も学生交流を拡大すべく検討している。

(5) 同窓会・学生自主活動ほか

・昨年度より回数は減っているが、SPH カフェが卒業生により定期的開催されているほか、学生による自主的な研修会も開かれている。

・一部の同窓生から、OB 同士の交流やセミナー開催、就職マッチング等を行うため、同窓会をベースに NPO の組織化などできないか相談を受けている。一方で卒業生の中には入試支援サービス含めたビジネスを行っている者もいる。組織化の方法や東大 SPH との距離感についてはいまだ検討中である。

(6) Faculty Development、教員事務連絡会議

・コンピテンシー教育の評価について筑波大学から我妻ゆき子教授を招き講義いただいた。コンピテンシー概念のファカルティ間での共有化を開始している。

・9 月 26 日に教員事務連絡会議を開催し、教員の世代交代や SPH のミッションビジョンについて議論があった。

(7) 2025 年度について

・A 教授（医療情報システム学）、B 教授（臨床情報工学）が同時に退官し、情報学系の講義が休講になるため対応策を検討している。

・C 准教授が 9 月までサバティカルのため、講義は A セメスターに行うことになった。

・女性教員採用枠を活用し准教授が増える。

・カリキュラムについて、講義の実施時期や休講、新規開講科目の説明があった。

・厚労省教育訓練給付制度について、1 年コースの指定を現在申請中である。

(8) 内外情勢、今後の問題などについて

・東大 SPH の中長期ビジョンの再検討が必要である。

・教員の世代交代が進んでおり、SPH としての分野横断、複合学術的特性を生かした教育計画をどう打ち出すかが課題である。

・学生のキャリアパスについて、博士課程進学者向けのキャリア懇談会を 6 月に開催しているほか、就職者向けには 3 月に懇談会を開催している。

・官庁などへの就職については同窓会を通じた人脈の活用も考えている。

(坂元委員) サバティカルを取得したことがある教員はこれまでで2名か。

(橋本専攻長) A教授とC准教授の2名である。特にミッドキャリアの教員には必要だと考えている。

(坂元委員) 修了生アンケートでは高度な知識が不足しているとの声があるが、具体的に高度な知識とは何を指しているのか。

(橋本専攻長) SPHは分野の幅が広く、入門・初級の知識はつくが、職業や研究で使いこなせるほどの知識を得られていないという意味だと考えている。中上級の知識がつくような指導を行いたいと考えているものの、キャパシティの問題で実現できてはいない。昨年、東大SPHのOBによる上級の統計学を扱った特別講義を行ったが、それは好評であった。

(坂元委員) 中上級の統計学の知識を望んでいる人はどのような学生が多いのか。

(橋本専攻長) ひとつは研究の道を考えているが、自分で仮説を立てる能力がない人が多い。その能力を身に着けたいならば博士課程に進学してほしいというのが本音でもある。もうひとつは実務経験を積みたい人で、製薬企業のようなビッグデータサイエンスを扱えるようになりたい人である。東大SPHとして有料で実践向けのセミナーを行うのも手だが、これもキャパシティの問題がある。

(康永教授) 臨床分野でもデータの活用についてはSPH内外から多くの要望があり、例えば学会でセミナーを行うと多くの参加者が集まる。それとSPH内での教育をどう分けるかも考える必要がある。SPHの学生は課題研究を行う中でOn the Jobでトレーニングし習得させている状況。

(坂元委員) 役に立つ統計のみ教えればよい、という考えにも陥ってしまう懸念がある。

(橋本専攻長) 坂元委員のおっしゃるとおりであり、公衆衛生の道具としての統計、あくまで課題設定できる能力を持ったうえでの統計であるという考え方は堅持したい。

(浅野委員) 修了生の進路先とアンケートの回答の傾向などの関係がわかるともって面白いと思う。東大SPHの今後の方針を考えるうえで卒業生のキャリア形成の視点を欠かすことができないだろう。コンピテンシーマトリックスの検討作業とも関係すると思われる。また、海外との連携の話はとても良いので今後も拡大していくことが望ましい。SPHカフェの取り組みも素晴らしいと思う。東大SPH同窓会の外にも開かれているのか。また社会への発信還元などにどう結びつけるか、官庁でもキャリア採用などが活発化するなか、OBネットワークの活用なども考えるのがよい。ただし同窓会ベースのNPO組織化についてはビジネスですでに立ち上げている人との関係

が難しい。

(橋本専攻長) おっしゃるとおり NPO 組織化については既存ビジネスとの差別化を慎重に行い、東大 SPH がどう関わるか議論が必要である。MPH ホルダーとして日本の健康医療課題をシェアする人の集まりを支える NPO 組織が望ましい。

(浅野委員) SPH にはどんな人々がいるのか、どこで活躍しているのかは一般社会の人にもみてもらいたい。

(橋本専攻長) 我々では卒業生のリスト化が進んでいないのが課題になっており、同窓会は持っているようだ。こうした情報を管理するための専任の事務職員を雇えるように組織化をするのがよいと考えている。

(馬場委員) 就職活動が早期化しているため、キャリア懇談会を進学希望者と就職希望者の二つに分けているのはよいと思う。特別区でも採用時期は早まってきている。ただし、人手は不足しており、保健師など需要数の半分しか採用できない状況。都道府県も同様の傾向である。特別区の足立区では給食政策や自殺対策などに取り組んでおり、海外交流の留学生や日本人学生にもぜひ公共政策の伴教の一環として視察に来てもらいたい。また、課題解決型の授業を行うのもひとつの手ではないかと考える。足立区は主任研修で採用分野の垣根を超えた課題解決型の研修を行っており、効果的である。コンピテンシー醸成には解決型トレーニングが有効でありフィールドを提供することも可能である。育てながら採用していくことを進めている。コンピテンシー教育に関しては、その講義を取ることでどのような能力が身につくのかマークを付けるなどしてわかりやすくすることで、自信や自己肯定感の向上につながってよいのではないかと感じる。各々が自覚していないだけで、他学部の学生よりは知識が身についているように感じる。ロールモデルとの接点を作ってあげるうえで OB 名簿などの整備も検討されたい。

(坂元委員) 地方行政の採用の問題は学位を重視しない点にもあると考える。

(橋本専攻長) 中央行政も同様で、MPH ホルダーを技官として採用できないか提案したこともあるが、以前は国家資格でないと難しいとの反応だった。一方で少しずつ穴が開いてきており、考えが変わってきているとも感じる。

(坂元委員) 自身の勤める大学と、東大 SPH とで単位共有を行えるような制度があるといい。全国の小さい大学と大きい大学が相互に交流を行えば刺激にもなるはずだ。

(橋本専攻長) Credit-Exchange はよく話題に上るが、東京大学のほうが制度に対応できておらず、海外との交流時も問題になる。

(飯田委員) 公共政策大学院でも修了生の進路については大きな関心を持っている。東大 SPH で 1/3 が博士課程に進学しているのは感心する。文系では主にキャリアの間

題もありここで多くはない。官庁への進学者は今後増やしたい考えなのか。

(橋本専攻長) 必ずしもそうではないが、政策に関わる人を増やしたいとは考えている。

(飯田委員) 海外交流の件では受け入れの留学生は全員日本語が話せないのか。また、昨年度も英語の講義が少ないという話があったが、単位は取得できるのか。

(橋本専攻長) 単位交換は先ほどの話でもあったように行ってはいない。

(飯田委員) コンピテンシー教育について、どの講義を取ればどのような知識が身につくのかという色分けを以前分野横断型プログラムで行ったことがあり、学生にとって良いことだと考えている。また、修了生のネットワークに関しては、東大 SPH の方針を決定するうえで重要なので今後も連絡を取ったほうが良い。SPP でも OB 連絡網整備を強化したうえで、アンケートまで実施し修了生の高い満足度を確認できた。SPH の方針については認証評価の項目にもなっているのではないか。東大 SPH の立ち位置・ビジョンをどう作るかも重要。SPP は国際化を設立以来の中核ミッションとしており、他校との差別化を図ってきた。

(橋本専攻長) おっしゃるとおり認証評価の項目になっている。評価基準も変わってきており、近年は Mission Vision を持っているかどうかは重要になってきている。

5. 次年度教育計画と質疑

4 - (7) で説明済み。

6. その他

各委員より自由に意見が交わされた。

(坂元委員) 生成 AI の活用について、官庁でも導入が検討されているが、大学ではどうか。学生からは有料のものを大学が契約し使わせてほしいという声もある。大学院でも利用者はいるか。

(橋本専攻長) 基本的には大学は活用に反対はしていないが、プロパティや情報保護、盗用の問題を弁える必要がある。活用方法を教えつつ、創造性を養うことを目指しているが、模索している段階である。大学院にも利用者はいると思われる。

(康永委員) AI を活用し労力を省く点はよいと思うが、生成 AI には仮説形成を行う能力はまだ不足していると感じている。AI の作ったものを批判的に捉える視点も有効かと考える。

(飯田委員) 公共政策でも、課題における活用方法は各教員に任せている。どの部分が自分の考えなのか、どのくらい AI 利用したのかについて伝えられるようにすべきである。

7. 閉会挨拶（橋本専攻長）

以 上